

文部省選定 日本映画ペンクラブ推薦 第31回広告電通賞 第14回
日本産業映画コンクール奨励賞 第27回国際産業映画ビデオ祭国内
大会部門優秀賞

記録
35ミリ
カラー／40分

この映画は困難を極めた日本の製酪業の歴史を黒沢西蔵を中心に、
佐藤貢、瀬尾俊三の3人の創立者たちの歴史的証言をもとに構成し
た。当時の写真、ニュースフィルム等も丹念に集め、明治末から大
正・昭和の日本の乳業の歴史としても貴重な記録映画になっている。
これらの先覚者たちの足跡は、一企業の歴史を超えた、不屈の人間
たちのドラマである。



日本における酪農と製酪技術は、明治初期にいわゆるお雇い外国人
の指導によって官業で始まるが、順調には発展しなかった。北海道
はその主要な舞台だったが、寒冷地の稲作技術の発達によって、稲
作が主になっていく。しかし、稲作もその後、度重なる冷害凶作を
経て、再び酪農の復興が唱えられるようになる。その酪農の復興と、
製酪業の発展に尽くしたのが宇都宮仙太郎と黒沢西蔵であった。

黒沢は若き日に、足尾鉍毒事件で知られる田中正造に愛され、被
害民の救済に奔走したが、母の死を境に北海道に渡って宇都宮牧場
の牧夫になった。のちに独立して夫婦で小さな牧場を持ち、牛飼
い農民を糾合して、デンマーク農業を範として、「農民のつくったも
のは、農民の手で売る」という北海道製酪販売組合の工場生産と販
路開拓に奮闘する。だが大衆がバターにもチーズにも馴染めなかつ
た大正時代に、それらの販売には非常な苦勞がともなった。その黒
沢を製造技術面で助けたのはアメリカで製酪技術を勉強して帰国し
た若い佐藤貢で、販売面で片腕になったのが瀬尾俊三だった。

■企画
雪印乳業株式会社

スタッフ
■製作
村山英治
■脚本・演出
村山正実
■撮影
村山和雄
■音楽
山内 忠
■編集
沼崎梅子
■解説
川久保 潔